

参加型スポーツイベントの運営に関する研究

—特にトライアスロン大会に対するイメージについて—

○原田尚幸（鹿屋体育大学）

参加型スポーツイベント トライアスロン大会 イメージ

1. 緒言

スポーツイベントは、地域の活性化や知名度の向上、あるいはイベントの開催による経済効果を期待して多くの地域で開催されている。これらのスポーツイベントには、企業がスポンサーとなってプロ選手や世界レベルのトップアスリートを集めて開催する大規模なイベントから、地方自治体や公共団体が主導して一般市民が参加する地域レベルのイベントがある（湯澤，1992）。

地方自治体や公共団体が主導する地域レベルのスポーツイベントでは、イベントのコンセプトを明確に伝える多くの参加者の動員を図る必要がある（湯澤，1992）。したがって、イベントのコンセプトやイベント開催の告知、参加者の募集といった情報の伝達は、スポーツイベント運営における重要な広報活動であると考えられる。そこで本研究では、地方自治体や公共団体が主導するスポーツイベントの広報活動におけるキーワードのひとつとして、スポーツイベントに対するイメージに着目した。

スポーツイベントに対するイメージを明らかにすることは、参加者の募集案内やイベントのコンセプト、開催を告知するポスターやパンフレットの作成に関する情報を得ることが可能であると推察される。さらには、イベントのネーミングやキャッチフレーズ、イメージキャラクターが市民の参加促進に影響を及ぼすことから（岡本，1992）、これらの選定に際してイベントに対するイメージに関する情報が役立つものと考えられる。

また本研究では、地方自治体や公共団体が主導するスポーツイベントとしてトライアスロン大会を研究の対象イベントとした。トライアスロンは、2000年のシドニーオリンピックの正式種目として採用されることが決定されており、近年多くの大会が開催されるようになってきた。このことは、大会の開催数が1987年に36大会であったのが1997年には104大会（いずれもジュニアの大会も含むがデュアスロン大会は除く）に増加していることからもうかがえる（トライアスロンJAPAN，1987，1997）。

そこで本研究の目的は、参加型スポーツイベントとして第12回指宿トライアスロン大会の参加者を対象にトライアスロン大会に対するイメージを明らかにするとともに、参加経験別、性別、居住地別のトライアスロン大会に対するイメージを比較することにより、参加型スポーツイベントの運営における広報活動に関する情報を得ることにある。

2. 先行研究

スポーツイベントの運営に関する研究を概観すると、山口ら（1991）が全国規模のスポーツイベントであるスポーツ・レクリエーション祭の参加者を対象にして、自己負担金額に関する報告とイベント評価と開催県の再来志向との間に有意な相関がみられることを報告している。県レベルのスポーツイベントについては、萩ら（1993）が生涯スポーツイベントの参加者を対象に参加動機やイベント評価、参加継続意欲に関する報告を行っており、地域イベント活性化の方策として、広報活動の充実、高齢者や人的交流を意図したプログラムの充実が必要であると述べている。そして野川ら（1993）は、生涯スポーツイベントにおける参加者のイベントに対する評価と参加継続意欲との関連について報告しており、イベント運営に対する評価と参加継続意欲との間には正の相関があること、及び参加継続意欲を規定する要因が年齢によって異なることを報告している。

また本研究では、湯澤（1992）のスポーツイベントの分類に基づき競技者がイベントに参加する「する型」のスポーツイベントのことを参加型スポーツイベントと定義した。したがって、スポーツイベントをイベント会場で観戦する「見る・見せる型」のスポーツイベントは、本研究の対象ではない。

次にトライアスロン大会に関する研究では、太田ら（1991）が参加者の満足要因に関する研究としてボランティアの対応に対する評価が高かったことを報告している。そして山口（1993）の参加者によるイベント評価に関する報告では、地元住民の心のこもったサービスが評価されて宿泊施設の満足度が高かったと述べている。

また、萩ら（1994）は、参加者の大会参加経験別イベント評価について報告しており、初参加者は辛口のイベント評価をする傾向にある反面、リピーターのイベント評価は好意的になる傾向があると指摘している。

続いて、イメージに関する研究についてであるが、これまで様々な対象のイメージに関する研究が報告されてきた。その研究対象は、国家、地域、都市、企業、商品、人物、場所、空間、現象、言語、そして運動等多岐にわたっている。本研究と関連する研究について概観すると、浦田（1985）が女子短・大生を対象にスキーに対するイメージについて報告しており、経験者より未経験者の方がスキーに対して否定的なイメージを持っていること、及び技術の上達によって良いイメージを持つようになると述べている。そして久保（1988）は、大学生を競技志向と健康レクリエーション志向の2群に分類してスポーツに対するイメージを比較した。その結果、活動性や競争性が共通のイメージとしてあるものの、競技志向の学生はスポーツを苦しいイメージで捉えていると指摘している。次に辻ら（1990）は、サッカー部に所属する男女学生と一般の男女学生の4群におけるサッカーに対するイメージを比較・分析した結果、性差及び経験差により違いがみられたが、その違いは性差よりも経験差によるところが大きく、情緒的意味体系にも強く影響を与えていると述べている。さらに辻ら（1993）は、日本と英国のサッカー選手を対象にサッカーに対するイメージの比較結果を報告しており、日本の選手が英国の選手よりもサッカーをダイナミックで危険なスポーツであり、難しく複雑なものとして捉えていると述べている。また三戸ら（1995）は、大学生の体育・スポーツに対するイメージを測定し、体育の授業に比べスポーツの方が明るさ・楽しさ、道徳性、芸術・科学性を強くイメージしていると報告している。しかしながら、わが国のスポーツイベントに対するイメージに着目した研究は、ほとんど報告されていないのが現状である。

水島（1988）によれば、生活・文化・社会に関するイメージは、現実の認知にもとづきながら、その人の態度、係わり方と相互に影響し合っており、イメージの多様性はその人の性格や過去の体験に依存しているとのことである。トライアスロン大会に対するイメージは、心理学事典（外林ら編、1981）の企業イメージに関する記述と同様に参加者のトライアスロン大会に対する態度、期待、総体的な印象を意味していると考えられる。

3. 研究方法

本研究では、参加型スポーツイベントに対するイメージを明らかにするために、1997年5月18日に鹿児島県指宿市において開催された第12回指宿トライアスロン大会（Aコース：スイム1.5Km、バイク42Km、ラン10Km。Bコース：スイム0.39Km、バイク16.8Km、ラン4.2Km。）の参加者を対象に留置法による質問紙調査を実施した。その結果得られた有効サンプル数は、トライアスロン大会全参加者554人中の55.8%にあたる309人から回答を得た。

質問内容は、サンプルの個人的属性、大会参加回数、指宿トライアスロン大会に対するイメージの形容詞対19項目である。本研究では、イメージを測定する手法として多くの研究で用いられているOsgoodら（1957）が提議したSD（semantic differential）法を用いてトライアスロン大会に対するイメージを測定した。測定では、指宿トライアスロン大会を刺激概念として、井上ら（1985）や前述した体育・スポーツ関連のイメージに関する先行研究で用いられた形容詞対を参考にしながらトライアスロン大会の特性を考慮した上で19項目の形容詞対を選定した。そして、末永（1987）のSD法に関する尺度（形容詞対）の選定を参考にして、中央を「どちらでもない」とし、両極に向かってそれぞれ「やや」「かなり」「非常に」という限定詞を質問紙に記入し、7段階の双極性尺度を用いてイメージを測定した。なお、データの分析にあたっては、肯定的形容詞に7、否定的形容詞に1を配点した。

データの分析では、まず指宿トライアスロン大会に対するイメージ因子を明らかにするために因子分析（主成分分析、バリマックス回転）を実施した。因子の解釈は、固有値が1以上であり、形容詞対の因子負荷量が.400以上になることを基準とした。この結果、基準を満たさなかった形容詞対（親切的な—不親切的な）、及びひとつの形容詞対だけで1因子を構成した形容詞対（経済的な—不経済な）を除いた17項目で再度因子分析（主成分分析、バリマックス回転）を実施した。そしてさらに、抽出された因子の尺度群を平均して各因子の尺度得点を算出し、参加回数別（初参加者とリピーター）、性別（男性と女性）、居住地別（鹿児島県内と鹿児島県外）に1検定を用いて比較した。

4. 結果の概要

表1 サンプル属性

性 別 (n=309)	男 性	85.8%
	女 性	14.2
	計	100.0
平均年齢(n=308)		36.1歳
職 業 (上位3業種、 n=302)	会 社 員	36.4%
	公 務 員	26.5
	自 営 業	6.0%
居 住 地 (n=305)	鹿児島県内	39.0%
	鹿児島県外	61.0
	計	100.0
平均参加回数(n=309)		3.2回
※初参加者は、99名(32.0%) リピーター、210名(68.0%)		

表1は、サンプル全体の属性を示したものである。これによると、性別では男性が85.8%、女性が14.2%となっており、男性の参加者が8割以上を占めている。平均年齢は、36.1歳であり、職業は会社員36.4%、公務員26.5%、自営業6.0%とサンプル全体の6割が会社員と公務員であった。そして、居住地では鹿児島県内から参加した人が39.0%、鹿児島県外からの参加者が61.0%となっており、県外からの参加者が多いことがうかがえる。また、指宿トライアスロン大会への平均参加回数は3.2回であり、初参加者が32.0%、過去に参加経験のあるリピーターが68.0%となっていた。

表2は、指宿トライアスロン大会に対するイメージを構成する因子を明らかにするために実施した因子分析の結果を示したものである。分析の結果4因子が抽出され、全分散に対する累積寄与率は53.5%であった。そして、各因子の信頼係数（Cronbachの α 係数）を算出した結果、第1因子が.701、第2因子が.726、第3因子が.716、第4因子が.638となっており、各因子の安定度は高いと推察される。

第1因子では、高い因子負荷量を示した形容詞対として社交性やお

表2 指宿トライアスロン大会に対するイメージの因子分析の結果（バリマックス回転後）

尺 度 内 容	因 子 負 荷 量				Cronbachの α 係数
	F1	F2	F3	F4	
【外見因子】 (FAC1)					
10. 社交的 な—非社交的 な	.743				.701
13. おしゃれな—だ さ い	.736				
19. 派手 な—地 味 な	.696				
1. 明 る い—暗 い	.639				
7. 健康的 な—不 健康 な	.509				
【挑戦水準因子】 (FAC2)					
2. 楽 な—苦 し い		.731			.726
8. 激しくない—激 し い		.704			
5. 簡 単 な—難 し い		.672			
14. 元 気 な—疲 れ る		.635			
11. 一 般 的 な—特 殊 な		.569			
4. 孤独でない—孤 独 な		.554			
【親近感因子】 (FAC3)					
17. 参加しやすい—参加にくい			.807		.716
18. 便利 な—不 便 な			.759		
16. 家族向き—家族向きでない			.578		
12. 親しみやすい—親しみにくい			.532		
【費用因子】 (FAC4)					
15. 割 安 な—割 高 な				.884	.638
9. 安 価 な—高 価 な				.700	
固 有 値	3.53	3.36	1.44	1.06	
寄 与 率 (%)	20.6	18.7	8.2	5.9	
累 積 寄 与 率 (%)	20.6	39.3	47.6	53.5	

しゃれさ、派手さや明るさといったトライアスロン大会の外見に関する内容であったことから「外見因子」と命名した。第2因子では、トライアスロン大会に対する楽しさや激しさ、難易度や特殊性に関する形容詞対の因子負荷量が高い値であったことから「挑戦水準因子」と命名した。第3因子では、参加のしやすさや便利さ、親しみといった参加者とトライアスロン大会との間の立地的、心的距離を示す内容であったことから「親近感因子」と命名した。そして第4因子では、高い因子負荷量を示した形容詞対がトライアスロン大会に対する金銭的内容を示していることから「費用因子」と命名した。

次に、参加経験別、性

別、居住地別に抽出された各因子の尺度得点を比較した結果を示したものが表3、表4、表5である。まず、表3の参加経験別にみた尺度得点の比較結果によると、挑戦水準因子(F2)と親近感因子(F3)において、初参加者よりもリピーターの方が有意に高い値を示した。この結果は、トライアスロン大会をリピーターの方が初参加者よりも挑戦水準が低く、身近に捉えていることを示唆している。

表3 参加経験別にみた尺度得点の比較

	初参加者 (n)	リピーター (n)	t-value	d. f.
F1【外見】	5.09 (97)	5.10 (207)	-0.12	302
F2【挑戦水準】	4.02 (94)	4.35 (199)	-3.25**	291
F3【親近感】	4.99 (98)	5.23 (206)	-2.07*	302
F4【費用】	3.70 (97)	3.82 (206)	-1.00	301

*p<.05, **p<.01

表4は、性別に各因子の尺度得点を比較した結果であるが、親近感(F3)において男性より女性の方がトライアスロン大会を身近に捉えている傾向にあるものの、有意な差は認められなかった。

表4 性別にみた尺度得点の比較

	男性 (n)	女性 (n)	t-value	d. f.
F1【外見】	5.08 (261)	5.16 (43)	-0.59	302
F2【挑戦水準】	4.26 (252)	4.13 (41)	0.97	291
F3【親近感】	5.13 (261)	5.33 (43)	-1.28	302
F4【費用】	3.79 (262)	3.73 (41)	0.35	301

そして表5において、居住地別にみた尺度得点の比較結果をみると、挑戦水準(F1)と費用水準(F4)において、鹿児島県内の参加者より鹿児島県外の参加者の方が有意に高い値を示した。この結果は、鹿児島県外の参加者の方が鹿児島県内の参加者よりもトライアスロン大会の挑戦水準を低く捉え、費用も安く捉えていることを示唆している。

表5 居住地別にみた尺度得点の比較

	鹿児島県内 (n)	鹿児島県外 (n)	t-value	d. f.
F1【外見】	5.11 (116)	5.08 (184)	0.30	298
F2【挑戦水準】	4.06 (112)	4.36 (178)	-3.09**	288
F3【親近感】	5.27 (116)	5.08 (184)	1.70	298
F4【費用】	3.66 (116)	3.87 (184)	-1.93*	298

*p<.05, **p<.01